

## 宮古語の仮名文字表記法

狩俣繁久（琉球大学）

### 1. 宮古語の仮名文字表記の課題

研究成果の地域社会への還元、一般利用者の利便性などを考慮して、今回の調査報告の方言資料を仮名文字によって表記する。宮古語を音節文字の仮名文字によって表記するには、子音のみで1拍の音節を形成する成節的な子音をどのように表記するか、子音が音節主音になって他の子音と結合して形成された音節をどのように表記するかという大きな課題がある。あわせて、これまで宮古語を仮名文字で表記してきた慣習的な表記の扱いと現代日本語の仮名文字との共存の2点も考慮しなければならない。

### 2. 成節的な子音の表記

宮古語の成節的な子音 *m*、*n*、*v*、*f*、*s*、*z*、*ts*、*dz*、*l* は、母音と結合せず子音単独で1拍の音節を形成して単語形成に参加する。語末に成節的な子音を持つ名詞に助詞の *ja* (は) と *ju* (を) を後接させた曲用形(1)~(8)は、後続する助詞の頭子音 *j* を完全同化させて重子音をつくる<sup>1</sup>。いっぽう、語末に母音を持つ名詞は助詞の *ja* (は) と *ju* (を) 融合させるが、重子音は形成しない(9)~(11)。語末に舌尖母音の現れる石垣市四箇方言も重子音を形成せず、母音の音融合(12)~(14)が見られる<sup>2</sup>。

- 1) カム<sup>◦</sup>*kam* (神)、カンマ *kamma* (神は)、カンム *kammu* (神を)
- 2) カン *kan* (蟹)、カンナ *kanna* (蟹は)、カンヌ *kannu* (蟹を)
- 3) ユヴ *juv* (粥)、ユヅヴァ *juvva* (粥は)、ユヅヴウ *juvvu* (粥を)
- 4) ヤフ *jaf* (厄)、ヤッフア *jaffa* (厄は)、ヤッフウ *jaffu* (厄を)
- 5) マス<sup>◦</sup>*maz* (米)、マッサ<sup>◦</sup>*mazza* (米は)、マッス<sup>◦</sup>ウ *mazzu* (米を)
- 6) ウス *us* (牛)、ウッサ *ussa* (牛は)、ウッスウ *ussu* (牛を)
- 7) マツ *mats* (松)、マツツア *mattsa* (松は)、マツツウ *mattsu* (松を)
- 8) ピズ *pidz* (肘)、ピツツア *pittsa* (肘は)、ピツツウ *pittsu* (肘を)
- 9) ウヤ *uja* (父)、ウヤー *uja:* (父は)、ウヨー *ujo:* (父を)
- 10) アブ *abu* (洞)、アボー *abo:* (洞は)、アブー *abu:* (洞を)
- 11) イミ *imi* (夢)、イミヤー *imja:* (夢は)、イミュー *imju:* (夢を)
- 12) ウスイ<sup>◦</sup>*usɿ* (牛)、ウスエー *use:* (牛は)
- 13) ウツイ<sup>◦</sup>*utsɿ* (内)、ウツエー *use:* (内は)
- 14) ミズイ<sup>◦</sup>*midzɿ* (水)、ミズエー *use:* (水は)

<sup>1</sup> 曲用形に見られる重子音が口蓋音化していないことから、助詞の *ja* (は)、*ju* (を) は歴史的には \**wa*、\**wo* であったと考える。\**tsukiwa* > *tskssa* (月は)、\**tsukijo* > *tsksfu* (月夜)。

<sup>2</sup> 同化には隣接同化と遠隔同化があるが、琉球語には母音の遠隔同化は見られるが、子音の遠隔同化は見られない。すなわち、母音を間において子音の韻質を離れた子音に与えることはできない。\**udzura* > *udz ra* > *uttsa* (鶉) 等の音韻変化もそのことを裏付ける。

## 2.1 成節的な v

成節的な v は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも現れる。この v をウに濁点「゛」を付してヴで表す。このヴは日本語の外来語表記に用いられるものである。このヴが有声唇歯摩擦音の表記であることは音声指導と文字指導をとおして周知させる。

15) ヴツ vts (打つ)、キヴス kivs (煙)、クヴ kuv (昆布)

## 2.2 成節的な m

成節的な m は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも現れる。この m をムに半濁点「゜」を付してム<sup>゜</sup>で表す。半濁点を付す表記は、宮古島の人たちが「イ<sup>゜</sup>」「ス<sup>゜</sup>」等で既に実行している。

16) ム<sup>゜</sup>タ mta (土)、ム<sup>゜</sup>ツ mtsu (道)、アム<sup>゜</sup> am (網)、カム<sup>゜</sup> kam (神)

## 2.3 成節的な z

成節的な z は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも現れる。この z をスに半濁点「゜」を付してス<sup>゜</sup>で表す。このス<sup>゜</sup>が無声唇歯摩擦音の表記であることは音声指導と文字指導をとおして周知させる。なお、成節的な z の表記にス<sup>゜</sup>を使用することは宮古島の人々が既に実行している。なお、イ<sup>゜</sup>の表記もあるが、このイ<sup>゜</sup>は大神島方言の舌尖母音や石垣島方言の舌尖母音の表記に使用する。なお、zu はス<sup>゜</sup>ゥで表す。語例：ス<sup>゜</sup>ス<sup>゜</sup>ゥ zzu (魚)。

17) ス<sup>゜</sup>サ<sup>゜</sup> zza (父)、ピス<sup>゜</sup> piz (大蒜)、マス<sup>゜</sup> maz (米)

## 2.4 成節的な f

成節的な f は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも現れる。この f をフで表す。このフが無声唇歯摩擦音の表記であることは音声指導と文字指導をとおして周知させる。なお、成節的な f の表記にフを使用することは宮古島の人々が既に実行している。なお、fu はフゥで表す。語例：フフゥ ffu (黒)。

18) フタイ ftai (額)、フツ fts (口)、フム fmu (雲)、ヤフ jaf (厄)

## 2.5 成節的な s

成節的な s は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも現れる。この s をスで表す。このスが無声歯茎摩擦音の表記であることは音声指導と文字指導をとおして周知させる。なお、成節的な s の表記にスを使用することは宮古島の人々が既に実行している。なお、su はスゥで表す。語例：ススゥ ssu (白)、マースゥ ma:su (塩)。

19) スマ sma (島)、スタ sta (下)、スダ sda (舌)、ムス mus (虫)、ウス us (牛)

## 2.6 成節的な ts

成節的な ts は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも現れる。この ts をツで表す。このツが無声歯茎破擦音の表記であることは音声指導と文字指導をとおして周知させる。なお、成節的な ts の表記にツを使用することは宮古島の人々が既に実行している。なお、tsu はツウで表す。語例：ム°ツウ mtsu (味噌)。

20) ツナ tsna (綱)、ム°ツ mts (道)、ムツ muts (餅)、パツ pats (蜂)

## 2.7 成節的な dz

成節的な dz は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも現れる。この dz をズで表す。このズが有声歯茎摩擦音の表記であることは音声指導と文字指導をとおして周知させる。なお、成節的な dz の表記にズを使用することは宮古島の人々が既に実行している。なお、dzu はズウで表す。語例：ズウー dzu: (さあ、呼びかけ)

21) ズマミ dzmami (落花生)、ミズ midz (水)、ピズ pidz (肘)、ム°ズギ mdzgi (醜い)

## 2.8 成節的な n

成節的な n は語頭、語中、語尾のいずれの位置にも現れるが、p、b、m の前には現れないか、現れにくい。その点は日本語の撥音に似る。この n を日本語の撥音と同じンで表す。

22) ンニャ nna (もう)、ンヌツ nnuts (命)、イン in (犬)、カン kan (蟹)

## 2.9 成節的な l

伊良部佐和田方言・長浜方言、多良間島方言の成節的な l、八重山語新城上地島方言の r はルに半濁点「°」を付して、ル°で表す。多良間島方言の l の表記にイ段の仮名「リ」を用いたものも見られるが、ウ段の仮名を用いるツ、ズ、ス、フの表記との一貫性を重視する点でも奄美大島南部方言の音節を閉じる位置に現れる子音の表記との一貫性を重視するという点でも l の表記にル°を用いることには合理性がある。また、成節的な子音の表記の統一性を重視することは児童生徒への仮名文字指導を考慮するなら必要だろう。

23) パル°pal (針) 伊良部佐和田

24) パル°par (針) 新城島

清音の仮名文字に付される補助記号としての濁点、半濁点は、無声破裂音の有声破裂音への変更(か>が、た>だ)、無声両唇摩擦音の有声両唇破裂音への変更(は>ば)、有声軟口蓋破裂音の有声軟口蓋鼻音への変更(き>ぎ)にみるように、音素素性の変更を示すものである。ム°m、ル°lは、開音節ム mu、ミ mi、および、ル ru、リ ri が母音の音消失によって発生した成節的な子音に変化したものである。ここでの半濁点「°」は、開音節ム、ミ、ル、リの成節的な子音への変更を表す補助記号として使用する。

## 2.10 成節的な長子音

宮古語の子音には、母音と結合せず子音単独で 2 拍の音節を形成し単語形成に参加する成節的な  $m:$ 、 $n:$ 、 $v:$ 、 $f:$ 、 $s:$ 、 $z:$ 、 $l:$ がある。この長子音は成節的な子音を表す仮名文字に長音を表す「ー」を付けて表す。

- 25) ム<sup>°</sup>ー  $m:$  (甘藷)、ム<sup>°</sup>ー  $m:$  (熟む)、ム<sup>°</sup>ータス<sup>°</sup>  $m:taz$  (熟んだ)  
 26) ン<sup>°</sup>ー  $n:n:$  (似ている)、ン<sup>°</sup>ーカス<sup>°</sup>  $n:kaz$  (似ている)  
 27) ヴ<sup>°</sup>ー  $v:$  (売る)、ヴ<sup>°</sup>ータス<sup>°</sup>  $v:taz$  (売った)  
 28) フ<sup>°</sup>ー  $f:$  (閉じる)、フ<sup>°</sup>ータス<sup>°</sup>  $f:taz$  (閉じた)、  
 29) ス<sup>°</sup>ー  $s:$  (酔)、ス<sup>°</sup>ー  $s:$  (磨る)、ス<sup>°</sup>ーダス<sup>°</sup>ス<sup>°</sup>ダス<sup>°</sup>  $sda:s:sda:s$  (涼しい)、  
 30) ス<sup>°</sup>ー  $z:$  (叱る)、ス<sup>°</sup>ータス<sup>°</sup>  $z:taz$  (叱った)、ス<sup>°</sup>ーシャ  $z:sja$  (吃音者)、  
 31) ズ<sup>°</sup>ー  $dz:$  (地面)、

音韻的に長短の対立を有する成節的な子音が存在することは宮古語の大きな特徴である。

ム<sup>°</sup>マ  $mma$  (祖母)                      ススウ  $ssu$  (白)  
 ム<sup>°</sup>ーマ  $m:ma$  (甘藷は)、              ス<sup>°</sup>ースウ  $s:su$  (酔を)

## 3. 重子音の表記

宮古語の成節的な子音の表記の課題には、後続の子音と同じ韻質の子音となるとききの表記、すなわち重子音の表記がある。

### 3.1 重子音 mm

$m$ の前に現れる成節的な両唇鼻音  $m$  は、日本語の撥音ン  $N$  と同じく、後続の両唇音に同化しているように見える。日本語のサンマ (秋刀魚)、アンマ (按摩) を借用語として宮古語に混ぜて使用するとき、これを成節的な  $m$  と同じム<sup>°</sup>とみなして、サム<sup>°</sup>マ、アム<sup>°</sup>マと表記することになる。これは日本語と同じ単語を異なる表記にすることになるという不都合が生じる。いっぽうで、日本語からの借用語を日本語のまま表記すると、 $amma$  という同じ音声形式の単語をアム<sup>°</sup>マ  $amma$  (網は) と書いたり、アンマ  $amma$  (按摩) と書いたりして、表音性が担保されない。

ム<sup>°</sup>を語末に持つ名詞の曲用形の表記において、日本語の借用語の表記に揃えると、 $m$ 、 $b$  で始まる接辞が後続するとき、ン  $n$  を語末に持つ名詞の曲用形との区別がつかなくなった (次頁 34、35 の下線部)、ム<sup>°</sup>ー  $m:$  (熟む) の否定形ム<sup>°</sup>マン (熟まない)、中止形ム<sup>°</sup>ミー (熟んで) 等の活用形の語幹がム<sup>°</sup>とンの二つになったり、不都合が生じる。

伝統方言の語形の表記を優先させて、借用語を含む全ての成節的な  $m$  (重子音を含む) をム<sup>°</sup>と表記することは、宮古語の体系性を担保するためには必要だが、非母語話者の負担軽減を考慮して、(33) のように語中の重子音  $mm$  の前の  $m$  をンと表記する。非母語話者の宮

古語の使用が増えれば日本語からの借用語の使用頻度も増し、ンの使用も増えることを考慮したものである。

- 32) カム° kam (神)、カム°マ kamma (神は)、カム°マイ kammai (神も)  
 33) カム° kam (神)、カンマ kamma (神は)、カンマイ kammai (神も)  
 34) カン kan (蟹)、カンナ kanna (蟹は)、カンマイ kammai (蟹も)  
 35) ム°ー m: (熟む)、ム°ータス° m:taz (熟んだ)、ム°マン mman (熟まない)、

重子音だけでなく語中の p、b の前の m もンと表記する。しかし、語頭の成節的な m は全てム°と表記する。

### 3.2 重子音 nn

成節的な n は語頭、語中で重子音になる。この重子音を日本語の撥音ン N と同じくンで表す。また、重子音に限らず t、d、s、z、k、g の前の成節的な n もンで表記する。

- 36) ンニャ nna (もう)、ンヌツ nnuts (命)、  
 37) アンナ anna (母)、アング anga (姉)、バンタ banta (私たち)、  
 38) インナ inna (犬は)、カンナ kanna (蟹は)、カンマイ kammai (蟹も)

### 3.3 重子音 vv

成節的な v は語頭、語中で重子音になる。この重子音を促音ッで表記 (40) することも可能だが、ヴー v: (売る) の過去形ヴータス° (売った)、勧誘形ヴヴァ (売ろう)、中止形ヴヴィー (売って) 等の活用形の語幹がヴとッの二つ (45 参照) になって不都合が生じる。v で終わる単語の ja と ju の曲用形に生ずる重子音を促音ッで表記すると語幹部分に一ヴと一ッの二つの形式 (43 参照) が現れる。成節的な v を統一的に表すという意味では必要だが、成節的な m のばあいと同じく、非母語話者への配慮を重視して (42)、(46) のように語中の重子音の前の v をッ (促音) で表記する。ただし、語頭の重子音はヴで表記する。

- 39) ヴヴァ vva (君)、アヴヴァ avva (油)、クヴヴァ (脹脛)、  
 40) ッヴァ vva (君)、アッヴァ avva (油)、クッヴァ (脹脛)、  
 41) クヴ kuv (昆布)、クヴヴァ kuvva (昆布は)、クヴマイ kuvmai (昆布も)  
 42) クヴ kuv (昆布)、クッヴァ juvva (昆布は)、クヴマイ juvmai (昆布も)  
 43) ヴー v: (売る)、ヴータス° v:taz (売った)、ヴヴァ vva (売ろう)、ヴヴィ vvi (売れ)  
 44) ヴー v: (売る)、ヴータス° vt:az (売った)、ッヴァ vva (売ろう)、ッヴィ vvi (売れ)  
 45) ニヴ niv (寝る)、ニヴタス° nivtaz (寝た)、ニヴヴァ (寝よう)、ニヴヴィ nivvi (寝ろ)  
 46) ニヴ niv (寝る)、ニヴタス° nivtaz (寝た)、ニッヴァ (寝よう)、ニッヴィ nivvi (寝ろ)

### 3.4 重子音 ff

成節的な f は語頭や語中で重子音になる。この重子音を促音ッで表記 (49) することも可能だが、フー f: (閉じる) の過去形フータス° (閉じた)、勧誘形フヴァ (閉じよう)、中止形フヴィ (閉じて) 等の活用形にフとッの二つの語幹を設定することになる。f で終わる単

語の **ja** と **ju** の曲用形に生ずる重子音を促音ッで表記すると語幹部分に一フと一ッの二つの形式 (51) が現れる。しかし、(52) のような外来語の表記との競合、およびこれらの外来語を混ぜて書く機会の増加を考慮すると、非母語話者の利便性も無視できない。そこで、語頭の重子音はフで表記するが、語中の重子音は、(50) のようにッ (促音) で表記する。

- 47) フタイ ftai (額)、フツ fts (口)、フム fmu (雲)、ヤフ jaf (厄)、
- 48) ッファ ffa (子)、マッファ maffa (枕)、スタッフャ sdaffja (吃音)
- 49) ヤフ jaf (厄)、ヤッフア (厄は)、ヤッフウ jaffu (厄を)
- 50) ヤフ jaf (厄)、ヤッフア (厄は)、ヤッフウ jaffu (厄を)
- 51) フー f (閉じる)、フファ ffa (閉じよう)、フフィ ffi (閉じろ)
- 52) バッフアリン baffarin (薬名)、ビュッフエ bjuffe (ビュッフエ)

### 3.5 重子音 zz

成節的な **z** は語頭、語中で重子音になる。この重子音をッス°ウ zzu、ッサ°zza のように促音ッで表記することも可能である。しかし、語幹末が **z** の名詞の **ja** と **ju** の曲用形における語幹 (相当部分) の統一性を考慮してピス°サ°pizza (大蒜は)、ピス°ス°ウ pizzu (大蒜を) のように表記することも可能である。

歯茎摩擦音ス° **z** と後続の子音が語頭に同じ子音で現れるばあい、ス°サ°zza (父)、ス°ス°ウ zzu (魚) のように、サ°za、ス°ウ zu のように表記する。語中の重子音 **zz** は、成節的な **f** や次の **s** と同じく、(55) のようにッ (促音) と表記する。

- 53) ス°サ° zza (父)、ス°ス°ウ zzu (魚)、マス°maz (米)、ピス°piz (大蒜)
- 54) マス°maz (米)、マス°サ°mazza (米は)、マス°ス°ウ mazzu (米を)
- 55) マス°maz (米)、マッサ°mazza (米は)、マッス°ウ mazzu (米を)
- 56) ス°ー z: (叱る)、ス°ータス°s:taz (叱った)、ス°サ° zza (叱ろう)、ス°シ° zzi (叱れ)
- 57) ス°ー z: (叱る)、ス°ータス°s:taz (叱った)、ッサ° zza (叱ろう)、ッシ° zzi (叱れ)

### 3.6 重子音 ss

成節的な **s** は語頭、語中で重子音になる。この重子音をッスウ、ッサのように促音を用いた表記 (61、63、65、67) も可能である。いっぽうで、語幹末が **s** の名詞の **ja** と **ju** の曲用形における語幹 (相当部分) の統一性を考慮すると同時に、その語形変化の指導とその理解をスムーズに行うことを重視してウススウ (牛を) のように表記したり、また、スー **s**: (磨る) の活用形の語幹の共通性を担保するうえで重子音の **s** をスで表記したりすることも可能である。

しかし、現代日本語の表記に頻出する「あっさり、いっしょう (一升)、ばっすい (抜粋)、はっせん (八千)」などの重子音 (促音) を日常的に使用する宮古語の非母語話者の負担軽減と利便性を重視して、重子音 **ss** の前の **s** を (62)、(64) のようにッ (促音) で表記することとする。ただし、語頭の重子音はスと表記する。

- 58) スマ sma (島)、スタ sta (下)、スダ sda (舌)、ムス mus (虫)、ウス us (牛)  
 59) ススウ ssu (白)、スサム<sup>o</sup>ssam (虱)、スシヤス<sup>o</sup>ssjaz (白蟻)、  
 60) ッスウ ssu (白)、ッサム<sup>o</sup>ssam (虱)、ッシヤス<sup>o</sup>ssjaz (白蟻)、  
 61) ウススウ ussu (後頭部)、ムسسウ mussu (蕙)、イスシヤク iffaku (一尺)  
 62) ウッスウ ussu (後頭部)、ムッスウ mussu (蕙)、イッシヤク iffaku (一尺)  
 63) ウス us (牛)、ウスサ ussa (牛は)、ウススウ ussu (牛を)、ウスマイ usmai (牛も)  
 64) ウス us (牛)、ウッサ ussa (牛は)、ウッスウ ussu (牛を)、ウスマイ usmai (牛も)  
 65) スー s: (磨る)、スータス<sup>o</sup>s:taz (磨った)、スサ ssa (磨ろう)、スシ ssi (磨れ)  
 66) スー s: (磨る)、スータス<sup>o</sup>s:taz (磨った)、ッサ ssa (磨ろう)、ッシ ssi (磨れ)

### 3.7 重子音 ts

成節的な歯茎破擦音 ts、dz のうち、dz は重子音を作らない。ts の重子音は、語中のみに現れる。この成節的な ts を日本語の促音と同じ小添字「ッ」で表記する。後述するように、ts、dz で終わる単語の ja と ju の曲用形は、他の成節的な子音と同じ振る舞いをしていて、母音で終わる単語とは異なる。

- 67) ズーdz: (地面)、ズマミ dzmami (落花生) ピズ pidz (肘)、ミズ midz (水)、  
 68) ミズ midz (水)、ミツツア mittsa (水は)、ミツツウ mittsu (水を)  
 69) ピズ pidz (肘)、ピツツア pittsa (肘は)、ピツツウ pittsu (肘を)

### 3.9 重子音 pp、tt、kk

無声破裂音 p、t、k の重子音は、語中のみに現れる。この重子音を日本語の促音と同じ小添字「ッ」で表記する。重子音の前半部の p、t、k は、母音と結合せず、子音単独で 1 拍に数えられ、現代日本語の促音と同じものである。宮古語のばあい、ッは全ての下位方言で語末には現れない。池間方言等の一部の下位方言の少ない単語を除けば語頭に現れない。

## 4. 音節主音的な子音の表記

宮古語の s、z、f、l は、音節主音的な子音として p、k、b、g、m と結合して 1 音節 1 拍の音節を形成し、s:、z:、f:、l: は 1 音節 2 拍の音節を形成する。s、z、f、l は短母音と同じ振る舞いをし、s:、z:、f:、l: は長母音と同じ振る舞いをする。

s は無声破裂音 p、k と結合し、z は有声破裂音 b、g、両唇鼻音 m と結合する。s と z は相補分布していて音韻論的には z に統一できるが、語幹末が s の名詞の ja と ju の曲用形にはサ sa になり、z の名詞の曲用形はサ<sup>o</sup>za になる。成節的な s、z と平行する現象で、音節主音として機能している s、z を小添字にする。児童生徒への指導を考慮して前者をウ段の仮名に小添字ッを付し、後者に小添字ッを付して表すことにする。

なお、音節主音的な s を語幹末にもつ名詞の ja、ju の曲用形 sakssa (先は)、sakssu (先を) の ss は重子音とはみない。

- 70) プッサ pssa (足)、プットウ pstu (人)、アスプッ asps (遊ぶ)  
 71) クッム ksmu (肝)、クッン ksn (衣服)、サクッ saks (先)、

- 72) アスプス asps (遊び)、アスプスサ aspssa (遊びは)、アスプスウ aspssu (遊びを)  
 73) サクス saks (先)、サクサ sakssa (先は)、サクスウ sakssu (先を)  
 74) ウス us (牛)、ウッサ ussa (牛は)、ウッスウ ussa (牛を)
- 75) カブズ kabz (紙)、ダブズ dabz (葬式・茶毘)  
 76) フグズ fgz (釘)
- 77) カブズ kabz (紙)、カブズサ kabzza (紙は)、カブズウ kabzzu (紙を)  
 78) フグズ fgz (釘)、フグズサ fgzzu (釘は)、フグズウ fgzzu (釘を)、  
 79) マズ maz (米)、マッサ mazza (米は)、マズウ mazzu (米を)、
- 80) クッフィ kffi (作れ)、クッファン kffan (作らない)  
 81) プスー ps: (日)  
 82) クスー ks: (来る)  
 83) ブズー bz: (座る)、ブズー bz: (亥)、  
 84) グズー gz:pa (簪)  
 85) ムズームズー mz:mz: (新しい)、ムズー mz: (巳)  
 86) クー kf: (作る)  
 87) ムルーナ ml:na (ニラ) プルーマ pl:ma (昼間)  
 88) ブルブルーガッサ blbl:gassa (クワズイモ)

なお、ユニコードにあるアイヌ語用の仮名文字の<sup>ス</sup>を代替的に使用すれば、インターネットやPCでの検索に使用できる。ただし、そのばあい、アイヌ語用の仮名文字には<sup>ス</sup>しかないなので、代替的に便宜的に<sup>ス</sup>に統一しておくことも可とする。

### 音節主音の子音と舌尖母音を含む音節

表 1. 宮古語の音節主音の子音

プス ps	プスサ pssa (足)、プストウ pstu (人)、アスプス asps (遊ぶ)
プスー ps:	プスー ps: (日)
ブズ bz	カブズ kabz (紙)、 カブズウ kabzzu (紙を)、カブズサ kabzza (紙は)
ブズー bz:	ブズーbz: (座る)、ブズーbz: (亥)、 ナブズーナブズ nabz:nabz(すべっこい)
クス ks	クスム ksmu (肝)、サクスウ sakssu (先を)、サクサ sakssa (先は)
クスー ks:	クスー ks: (来る)
グズ gz	フグズ fgz (釘)、フグズウ fgzzu (釘を)、フグズサ fgzza (釘は)

グズー gz:	グズーパ gz:pa (簪)
ムズー mz:	ムズームズー mz:mz: (新しい)、ムズー mz: (巳)
クフ kf	クフフィ kffi (作れ)、クフファン kffan (作らない)
クフー kf:	クフー kf: (作る)
ムルー ml:	ムルーナ ml:na (ニラ)
プルー pl:	プルーマ pl:ma (昼間)
ブル bl	ブルブルーガッサ blbl:gassa (クワズイモ)
ブルー bl:	ブルブルーガッサ blbl:gassa (クワズイモ)

表 2.

ツ ts	ツナ tsna (綱)、ムツ mts (道)、ムツ muts (餅)、パツ pats (蜂) アツア attsa (下駄、傍ら、畦道)、 ムツツア mttsa (道は)、ムツツア muttsa (餅は)、パツツア pattsa (蜂)
ズ dz	ズマミ dzmami (落花生)、ミズ midz (水)、ピズ pidz (肘)、ムズギ mdzgi (醜い) ウツザ uddza (鶉)、カツザ kaddza (蔓)、フツザ fddza (鯨) ミツザ middza (水は)、ピツザ pidz (肘は) 下里
ス s	スマ sma (島)、スタ sta (下)、スタ sda (舌)、ムス mus (虫)、ウス us (牛) ススウ ssu (白)、ウッスウ ussu (後頭部)、ムッスウ mussu (蕙) ウッスウ ussu (牛を)、ウッサ ussa (牛は) ムッスウ mussu (虫を) イッシン iſſin (一銭)、スシヤス ſſaz (白蟻)、スシューズ ſſu:z (知っている)、
フ f	フタイ ftai (額)、フツ fts (口)、フム fmu (雲)、ヤフ jaf (厄)、 フファ ffa (子)、マッフア maffa (枕)、スタッフヤ sdaſſja (吃音) ヤッフア (厄は)、ヤッフウ jaffu (厄を) バッファリン baffarin (薬名)、ビュッフエ bjuffe (ビュッフエ)
ヴ v	ヴツ vts (打つ)、キヴス kivs (煙)、クヴ kuv (昆布)、 ヴヴァ vva (君)、アッフア avva (油)、クッフア kuvva (脹脛) クッフア kuvva (昆布は)、クッフウ kuvvu (昆布を)
ズ° z	ズ°サ° zza (父)、ズ°ス°ウ zzu (魚)、ピズ° piz (大蒜)、マス° maz (米) ピツサ° pizza (大蒜は)、ピツス°ウ pizzu (大蒜を)、マツサ° mazza (米は)
ム° m	ム°タ mta (土)、ム°ツウ mtsu (道)、アム° am (綱)、カム° kam (神) ム°マ mma (祖母)、アンマ amma (綱は)、カンマ kamma (神は) アンマ amma (按摩)、サンマ samma (秋刀魚)、

ン n	ンニャ nja (もう)、ンヌツ nnuts (命)、イン in (犬)、カン kan (蟹) アンナ anna (母)、アンガ anga (姉)、バンタ banta (私たち)、 インナ inna (犬は)、カンナ kanna (蟹は)、
ル° l	パル°pal (針) パッル pallu (針を)、lliru ル°リル (入れろ) パル°par (針)

表3. 成節的な長子音

ム° m:	ム° m: (甘藷)、ム° m: (熟む)、ム°タス°m:taz (熟んだ)、
ン° n:	ン°ン° n:n: (似ている)、ン°カス°n:kaz (似ている)
ヴ° v:	ヴ° v: (売る)、ヴ°タス°vt:az (売った)
フ° f:	フ° f: (閉じる)、フ°タス°f:taz (閉じた)
ス° s:	ス° s: (酔)、ス° s: (磨る)、ス°ダ°ス°ス°ダ°ス° sda:s:sda:s (涼しい)
ス° z:	ス° z: (叱る)、ス°タス°z:taz (叱った)、ス°シャ z:ja (吃音者)
ス° s:	ス° s: (酔)、ス°ダ°ス°ス°ダ°ス° sda:s:sda:s (涼しい)、 ス°ス°ウ s:su (酔を)、
ズ° dz:	ズ° dz: (地面)、

表4. 大神島方言の舌先母音を含む音節

イ° ɿ	イ°ウ ɿu (魚)、イ°アラ ɿara (鎌)、マイ°maɿ (米)
イ° ɿ:	イ° ɿ: (飯)、イ°ウ ɿ:u (飯を)
プイ° pɿ	プイ°キ pɿki (髭)、カプイ°kapɿ (紙)、プイ° (亥年) カプイ°ウ kapɿu (紙を)
クイ° kɿ	プ°クイ°pu:kɿ (甘蔗)、クイ°ム kɿmu (肝)、クイ°ヌ kɿnu (角)、クイ° (地面)
スイ° sɿ	スイ°タ sɿta (舌)、スイ°マ sɿma (島)

表5.

ペア pæ	ペアイ°pæɾ (針) 大神島
ペエ pɛ	ペエイ°pɛɾ (針)、ペエルム°ナ pɛrumna (蝸牛) 大神島
ペアー pæ:	ペーク pæ:ku (百)、ペークム°pæ:kam (早い) 大神島
ペエー pɛ:	ペーク pɛ:ku (百)、ペークム°pɛ:kam (早い) 大神島
ケエ kɛ	ンケエフ nkef (海ブドウ) 大神島
ケア kæ	イケア ikæ (鳥賊)、ナイケア naikæ (跛行) 大神島
ケアー kæ:	タヴケアーtavkæ: (一人)、マウケアーmavkæ: (向かい)
ケエー kɛ:	タヴケエーtavkɛ: (一人)、マウケエーmavkɛ: (向かい)
フェー fɛ:	クッフエーイ°kffe:ɾ (作ってある)
レア ræ	クパレア kuparæ (吃音)
キュー kø:	キューkø: (今日)
ムュー mø:	ムューイ°mø:ɾ (姪甥)

## 八重山語の舌尖母音を含む音節

表6. 舌尖母音ɾと両唇音、軟口蓋音

ピイ° pɾ	カピイ°kapɾ (紙)、ピイ°ダルイ°pɾdarɾ (左) 石垣
ピイ°ー pɾ:	ピイ°ー pɾ: (日) 石垣
ビイ° bɾ	ティヌフビイ° tinufubɾ (手首)、ビイ°ー bɾ: (亥)
キイ° kɾ	キイ°ヌ kɾɿnu (衣服)、イキイ° ikɿ (息)、アルキイ° arukɿ (歩く)

ギイ° gɪ	ガギイ° gagɪ (鎌) 石垣方言
-----------	--------------------

表7 舌尖母音ɪと歯茎音

ルイ° rɪ	トゥルイ° turɪ (鳥)、ナルイ° narɪ (実)、パルイ° paɾɪ (針)、
スイ° sɪ	スイ°スイ° sɪsɪ (煤)、キプスイ° kɪpusɪ (煙) スイ°ー sɪ: (巢)
ツイ° tsɪ	ツイ°プル tsɪpuru (頭)、ツイ°ヲ tsɪɾa (顔)、フツイ° hutsɪ (口)
ツイ° tsɪ:	ツイ°ー tsɪ: (血)、ツイ°ー tsɪ: (乳)
ズイ° dzɪ	トゥズイ° tudzɪ (妻)、ピズイ° pidzɪ (肘)、ズイ°マミ dzɪmami (落花生)、

表8. 八重山語の前舌半広母音ɛを含む音節

ケエー ke:	ケエー ke: (粥) 波照間、 サケエー sake: (先は) 石垣
ゲエー ge:	ガゲエー gage: (鎌) 石垣
ペエー pe:	ペエー pe: (酢・鯨)、スペエー supe: (杓子) 波照間
ベエー be:	カベエー kabe: (紙は) 石垣
レエー re:	トゥレエー ture: (鶏は) 石垣
ツエー tse:	ミツエー mitse: (道は) 石垣
ズエー dze:	ミズエー midze: (水は)、トゥズエー tudze: (妻は) 石垣
スエー se:	ウスエー use: (牛は) 石垣

※石垣方言を含む八重山語の表記については、再検討が必要である。